

新規アルツハイマー病治療法の開発



公益財団法人神戸医療産業都市推進機構
先端医療研究センター
神経変性疾患研究部長

星 美奈子氏

認知症患者は、2018年の時点で3秒に1人の勢いで世界中において増加している。超高齢化社会への移行がとりわけ早く進む日本においては、認知症の約6割を占めるアルツハイマー病患者に対する根本治療法の開発は喫緊の課題である。

根本治療法としては、脳に蓄積する凝集したアミロイド β 蛋白質 ($A\beta$) に対する抗体薬が承認されている。しかし、抗体療法については、大量の抗体を継続的に投与する必要があること、そのために製造費がかさむこと、血中に残存する抗体による重大な副作用などが課題としてあり、抗体の成果を踏まえた次の治療法開発が待望されている。

アルツハイマー病発症の約9割は孤発性であり多様な因子により発症する。しかし、その要因によらず全ての患者は、 $A\beta$ モノマーが、凝集することで神経毒性を獲得することから始まり、 τ au病態・広範な神経脱落による認知症の発症へと進む。我々は、このアルツハイマー病に固有の発症経路「 $A\beta$ ・ τ au・神経細胞脱落」を順次起こさせる病態メカニズムが存在すると考え、長年それを追求し、トリガーの1つを解明することに成功した。今回、抗体療法の次の治療法として、我々が現在開発している治療法の一端をお話したい。